ふくいミュージアム

1992.9.30
No.22

福井県立博物館

勝山市で発掘された恐竜行跡化石（平成４年８月発掘・Ｐ６参照）

秋の企画

生命の大進化 ～中国の化石でたどる35億年～

9月12日(土)→10月18日(日)

地球誕生から46億年、今地球環境が世界的な問題となってきました。それは地球環境の変化が、私たち人類を含めた生物界に大きな影響をおよぼすからでしょう。

生命は今から約35億年前に海で誕生したと言われています。そして、めまぐるしい環境の変化に適応しながら、多くの種に分かれて進化をとげてきました。しかし、この生物の発展の過程で、絶滅した生物たちも多くいたのです。

この特別展では、中国の化石約250点を展示し、生命誕生から、魚類、両生類、爬虫類、そして人類まで、生命の大進化の過程を説明しています。

過去の生物たちの足どりを学び、現在から未来への人類のあり方と行く末を考えていただければと思います。

＜展示の展開と主な展示化石＞

生命の誕生

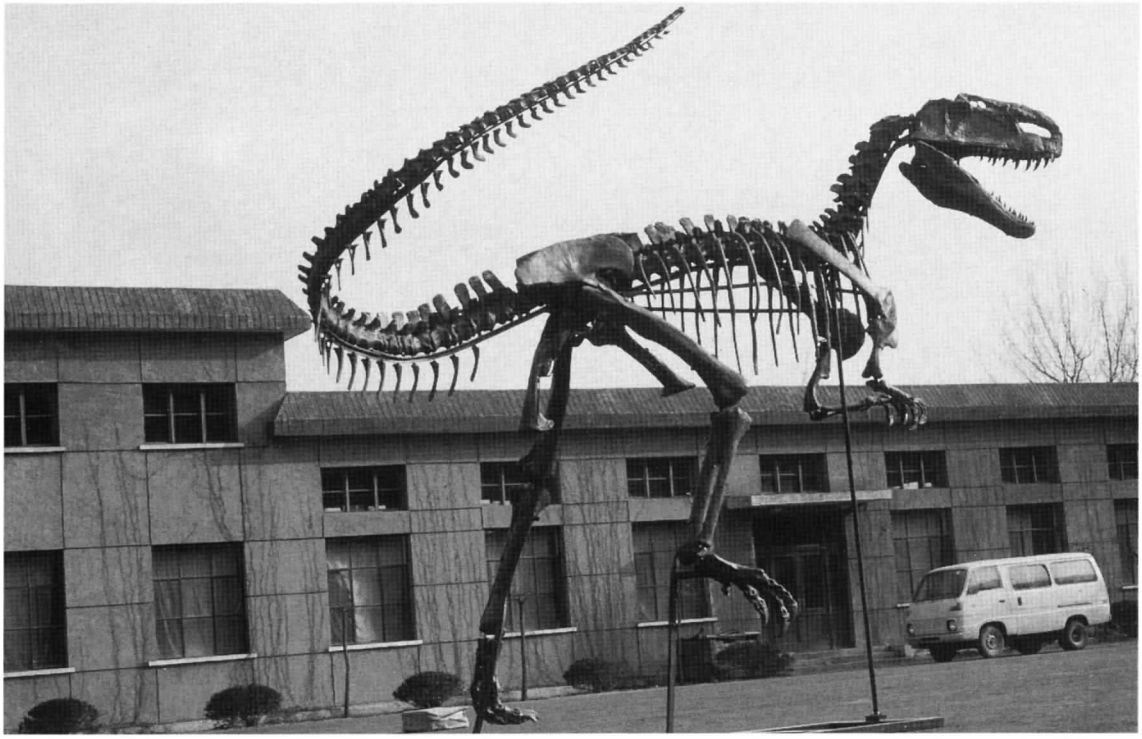
最古の化石	ストロマトライト
三葉虫の進化	ドレパヌラなど
澄江動物群	原介形虫類など
頭足類の進化	シノセラスなど
水中生物の多様化	サンゴなど
腕足動物	ヤンツェーエラなど

海の生物の発展

水中生物の多様化	双殻類
腹足類	シノベレロフォンなど
無脊椎動物のさまざま	紡錘虫など
頭足類の進化	アネトセラスなど
魚類の出現と放散	ファヤンガスピスなど

海から陸へ

植物の変遷	藻類



モノロフォサウルス

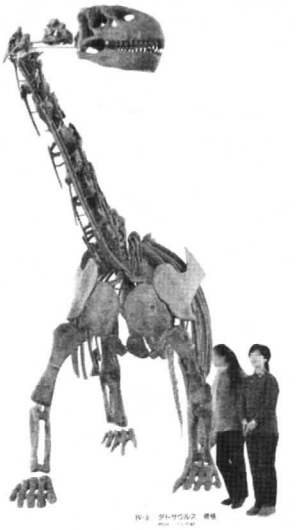
古生代　レピドデンドロンなど
中生代　クラドフィレビスなど
新生代　サバリテスなど
昆虫の世界　トンボ類など
最初の四足動物－両生類
プロキノプスなど

恐竜王国

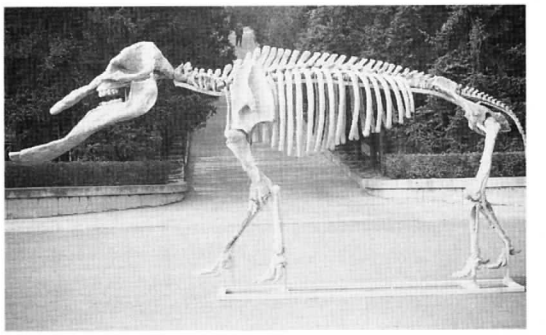
恐竜の祖先　ウジュスコビアなど
初期の恐竜　ダトサウルス
ジュラ紀の恐竜　モノロフォサウルス
白亜紀の恐竜　バクトロサウルス
恐竜足跡
恐竜の卵
翼竜　ファンヘープテルス
カメ　シネミス
鳥類　カタイオルニス

哺乳類の繁栄

哺乳類の祖先　トリティロドン
哺乳類のあけぼの　シノコノドンなど
奇蹄類の放散　キロテリウムなど
イノシシ類とシカ類の発展
ラゴメリックスなど
食肉類のいろいろ　オオハイエナ
ゾウ類の発展　プラティベロドン
小型哺乳類　ココミスなど
ヒトへの道－霊長類　リノピテクスなど



ダトサウルス

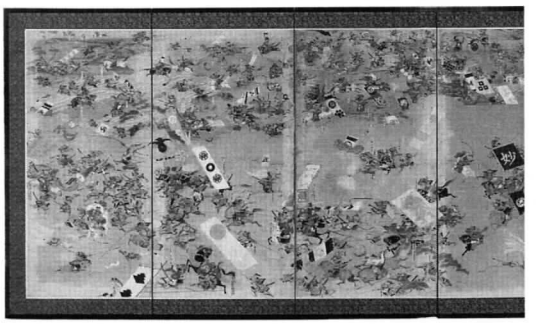


プラティベロドン

冬の企画

館蔵資料展

2月7日(日)→3月14日(日)



姉川合戦図屏風（部分）

博物館では開館以来、本県の自然や歴史、民俗などに関する資料の収集につとめてきました。これらの資料は、機会あるごとに展示してきましたが、まだ多くの資料が未公開のままです。そこで、今回の館蔵資料展は、新たに収蔵された資料をはじめ、未公開の資料も併せて公開し、いくつかのテーマをたてて、展示を構成します。

主な展示資料として、姉川合戦図屏風、海底から発見されたフジつぼの着いた平安時代の須恵器壷、平成4年度の恐竜化石発掘調査により出土した資料などが出品される予定です。

研究ノート

近世越前赤瓦の刻印
ー柴神社旧拝殿所用赤瓦の検討ー

1　赤瓦は、表面に酸化鉄溶液を塗って焼いた瓦であり、越前で江戸時代の初めごろに作られ始めた。明治期になるとこれに改良が加えられ、銀ねず瓦（銀色がかったねずみ色の瓦）へと変わっていった。

赤瓦には刻印（手書きのしるしも含む）をもつものがある。明治以降のそれは製瓦所を示していたといわれ、江戸時代の刻印もまた、瓦屋（瓦工房の当時の呼び方）を示していた可能性が高いと考えられている。

本稿では、瓦に残る工具の痕跡の観察をもとに、近世赤瓦の刻印について考えたい。工具の違い、そしてその使い方の違いは、その瓦を作った瓦屋と対応する可能性があるからである。

考察を行う対象としては、松岡町柴神社旧拝殿所用の赤瓦を取り上げることにした。これは鬼瓦の銘文や釉薬の発色からみて、寛政7年（1795）から19世紀中ごろにかけてのものと考えられる。

2　観察の結果、工具とその使い方に違いが見いだせたのは、軒丸瓦・丸瓦・袖丸瓦であった。そのため本稿ではこれらについてのみ検討を行う。

今回抽出できた違いは、以下のとおりである。

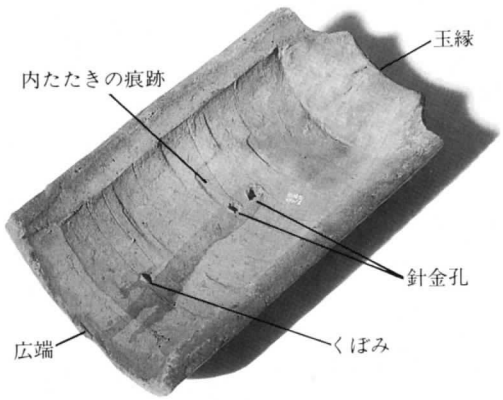


図1　丸瓦の部分名称（凹面を写す）

＊工具

・針金孔をあける工具

これには次の3種類がある。

（ヨリヌキ）丸い孔をあける工具。

（カマ）粘土を削ったりする工具。にぎりの先端を使って四角い孔をあけることができる。

（焼成後の穿孔）

製作時には針金孔をあけず、屋根にふくときに必要になって孔をあけた瓦もある。ただし使った工具はわからない。

・型にかぶせる布

丸瓦を作る際、まず円柱形や凸形の型に布をかぶせ、これに粘土板を押し当てておおまかな形を作る。このため瓦の凹面（裏側）には布目がつく。

この布には次の5種類がある。

（あ）縦横にさしぬいをした布。

（い）玉縁の部分にだけ目の粗い布を使い、他の部分には（あ）を使っている。

（う）縦横にさしぬいをするが、（あ）よりも間隔がかなり広い。

（え）縦にさしぬいをした布。

（お）（え）に紐を取り付けた布。

＊工具の使い方

・凹面広端寄りのくぼみの付け方

このくぼみの意味は今のところ不明である。上からみると三角形をした深いくぼみを付けるものと、形の整わない浅いくぼみを付けるものがある。

・内たたきのたたき方

瓦の大まかな形を作った後、これを凹形の型にのせて、凹面を板でたたく。これが内たたきである。

たたき方には次の6つがある。

（A）たたき板の先端を玉縁の付け根にそろえて、密にたたく。

（A′）Aに似ているが、玉縁もたたく。

（B）まばらにたたく。

（C）たたき板の先端が玉縁の付け根に来るようにたたいたあと、たたき板を広端の方へずらしてまたたたく。

（C′）Cに似ているが、たたき板の先端が広端の方へ少し寄っている。

（D）これまでのたたき方が広端側からのものであるのに対して、玉縁側からたたく。

これらの組合せの違いによって、瓦は表１のように１から12の群に分類できた。このうち４群と５群は、同じ種類の布を使っているかもしれないので、１つの群になる可能性がある。

３　江戸時代の瓦工房（当時は瓦屋と呼ばれることが多かった）は、親方と職人で構成され、粘土の採取から瓦の焼成までの作業を、一貫して行っていたと考えられている。工房がこのようなものであるとすると、同一工房内では、同種類の工具が使われることが多く、またその使い方もある程度類似すると考えられる。

そこで、表１において刻印と工具などにどのような関係があるのかをみてみる。このとき刻印を２つもつものは後にまわして、先に１つしかもたないものについて考える。

１～３群（Ｉの刻印だけをもつ）は、針金孔をあける工具とくぼみのつけかたが共通している。４・５群（IIの刻印）は先に述べたように１つの群になる可能性もある。６～８群（IIIの刻印）はくぼみのつけかた以外は共通している。11・12群（Ｖの刻印を１つだけもつ）は内たたき以外は共通している。

以上のように、１つしか刻印をもたないものについて見てみると、同じ刻印を使う群は工具やその使い方に共通する点が多く、刻印が工房を示しているという考えに符合する。

ではつぎに、刻印を２つもつものを見てみる。

10群は11・12群と共通する点が多いが、製作時に針金孔をあけていない。これについては、刻印の数の違いが工房の違いを示しているという解釈も可能であるし、同一工房の中でも刻印を２つ押して、何らかの違い（針金孔の有無？）を示すことがあると解釈することもできる。

１群には，ＩとＶの両方の刻印をもった瓦が１枚ある。これに使われている　の刻印は10～12群のものとよく似ていて、同一のものである可能性がある。逆に工具などについてみると１群の他の瓦と同じである。もしＶの刻印が11～12群のものと同一でないならば、Ｉの刻印が工房を示し、Ｖの刻印はまた別の意味を持って使われたと考えるのが最も妥当ではないだろうか。しかし、Ｖの刻印が同一の場合は今のところうまく説明できず、刻印が工房以外のものを示している場合もあるのかもしれない。これは今後の検討課題としたい。

今回の検討の結果、工具やその使い方からも、刻印が工房を示している可能性が指摘できた。しかし、異なる２つの刻印を持つ瓦については、刻印が工房と対応しない可能性もあり、今後の検討が必要である。また、今回取り上げた工具やその使い方は、粘土を瓦の形にする工程に関するものであり、瓦を焼く工程についても検討が必要であろう。（中原義史）

注(1)軒丸瓦と袖丸瓦は、丸瓦に瓦当や袖と呼ばれる部分をとりつけて作る。そのため、丸瓦を作る工程は共通している。

(2)これらには刻印のないものが10点あった。本稿は、刻印と工具などの関係から刻印の意味を考えていくので、刻印のないものは検討の対象からはずしておく。

表１　工具とその使い方による分類

群	工具		使い方		個数	刻印
	針金孔をあける工具	布	くぼみのつけ方	内たたきのたたき方		
1	ヨリヌキ	不明	浅い	A	1	ＩとＶ
					28	Ｉ
2		あ		B	6	
3		い		C′	1	
4		う	なし	C	13	II
5		不明			9	
6		あ	深い	なし	1	III
7			浅い		2	
8			なし		1	
9		お		A′	1	IV
10	焼成後の穿孔	え	深い	D	1	Ｖが２つ
11	カマ				7	Ｖ
12				なし	3	

Ｉ　II　III　IV　Ｖ

図２　刻印の拓影（1/2）

資料紹介

大坂の船絵馬

ここに紹介する資料は、敦賀市常宮の金毘羅神社に残る船を描いた絵馬です。表に「願主 沓浦 治兵衛 嘉永四」、裏に「ツルガ 正 御所中通り 六路屋権兵衛様分 七月廿三日出 大坂 杉本」の墨書が残っています。「六路屋権兵衛」は、幕末の旅宿を案内した『千島講宿帳』にみえる敦賀湊の小間物屋「六路や」のことで、「大坂 杉本」は船の描き方などからして、大坂の著名な絵馬師杉本清舟のことと思われます。すなわち、大坂の絵馬師杉本清舟が描いたものが敦賀の小間物商六路屋に送られ、それを求めた沓浦（常宮の隣浦）の治兵衛によって奉納されたことが推測されます。

ところで、船を描いた絵馬は一般に「船絵馬」と総称され、海運史の研究者の間で、「航海安全を祈願・感謝して船主や船乗りが社寺に奉納したもの」とよくいわれます。その多くは、今日、日本海沿岸を中心に残る大坂の絵馬師による弁才船を描いた絵馬を指しています。そして、これら大坂の船絵馬は、北前船など海運に携わった船主や船乗りが大坂に立ち寄った際にこれを買い求めたと考えられています。しかし、今回紹介する資料からは、大坂の船絵馬が敦賀湊でも売られていたことがわかります。

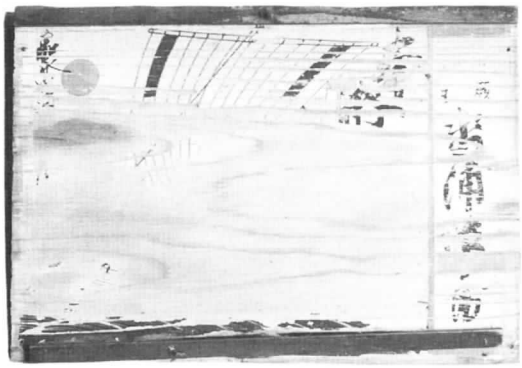
福井県内にも、海岸沿いの神社に大坂の船絵馬がたくさん残っています。もちろん、海運に携わった船主や船乗りが航海安全の祈願・感謝の意で奉納したものが大半を占めます。ところが、なかには大漁祈願や伊勢参宮記念、安産の祈願・感謝の意から奉納されたものがあります。とくに、敦賀市域において、海運に直接関わりがないと思われる人たちが奉納したものがみられます。

このことは、大坂の船絵馬が敦賀湊で売られていたことと無関係ではありません。海運関係者に限らず、地域のさまざまな人たちがこれを買い求めた結果でしょう。ここで厳密に言えば、「船絵馬」は決して海運関係者が奉納したものがすべてとは言えなくなります。はたして、「船絵馬」を解釈する際に、敦賀の事象を特殊なものと例外視してよいのでしょうか。さらに言えば、なぜ大坂で船絵馬が作られだしたのか、また、当地大坂ではこれがどのように用いられていたのかという根本的な問題も、まだ何も明らかにされていません。

敦賀に残された一枚の船絵馬をヒントにして、今後改めて「船絵馬」の歴史と習俗を考え直す必要があります。

（山形裕之）

（表）



（裏）

敦賀市常宮　金毘羅神社蔵

恐竜化石発掘ニュース

福井県立博物館は、平成4年度の恐竜化石発掘調査を、7月27日から8月11日まで勝山市北谷町の杉山川河岸で実施しました。約70平方メートルの面積を発掘し、その結果5つの異なる地層面に、恐竜の足跡化石群が発見されました。（表紙写真）

発見された恐竜の足跡化石群からは、連続した歩行（行跡）も確認され、獣脚類・竜脚類・鳥脚類などの群れが存在していたことがわかりました。獣脚類や鳥脚類の足跡には、長さが60～70cmもあるものがあり、外国に負けないくらい大きな恐竜が生活していたことがはっきりしました。

足跡の化石からは、その場所で恐竜が生活していたことや、歩いて行った方向、生活の様子などが具体的にわかります。

足跡化石が発見されたのは、手取層群赤岩亜層群と呼ばれている中生代白亜紀前期（約1億2000万年前）の地層からです。同じがけからは、これまでにイグアノドン科の恐竜をはじめとして、8種類の肉食・植物食恐竜が発見されています。

なお、発掘された足跡の化石は、現在現場で直接見ることはできません。そのまま現地で放置すると風化して化石が失われてしまうということや、がけの落石で安全に見学できないということなどから、現在埋めもどされています。

ビデオライブラリーから

佐分利のオオガセ

オオガセは漢字で書くと「大火勢」。高さ10m余りの柱に5段の横木をつけ、それぞれの端に大きな松いまつをつけたカセを回転させながら燃やします。

火の祭りには独特な雰囲気がありますが、夏の終り（8月23,24日）のオオガセはとくに魅力的です。闇がおり始めた夜8時過ぎ、むらの人が手に手にたいまつを持って、小高い丘に登る。行列を太鼓と鉦と、哀調を帯びた笛の音が導く。力を合わせて点火したカセを起こし、回転させ、一気に倒す。そしてまた起こして回転させる。丘に登ることを許されない女たちは、麓から、闇に浮かぶ火をみつめている。丘の騒がしさは、ただ遠く聞こえるだけ。

静けさと物さびしさと、勇壮さが不思議な調和をしているのです。

この行事は愛宕の神を祀る火伏せの行事とされ、撮影地、大飯町福谷ではむらの代表者が京都の愛宕神社へオオガセの火種をもらいにでかけています。しかし盆の送り火の性格も加わっています。

オオガセは佐分利谷のいくつかのの集落で行われていましたが、今は福谷だけかもしれません。この番組は火の祭りの魅力をじゅうぶんに伝え、また、行事の記録としても価値があります。　（坂本）

絹のできるまで

一匹の蚕（かいこ）が繭（まゆ）をつくるために吐く糸は、500分の1㎜と細く、1300mもの長さをもちます。蚕の繭から糸をとり衣服の原料とすることは、今から5000年ほど前に中国で発見されたと伝えられています。以来、この糸から美しい光沢をもつ絹織物が生み出されてきたのです。

この番組では、繭をつくる蚕の一生や、蚕を育てる養蚕農家の仕事、そして繭から生糸をとり出す繰（そう）糸（し）器械の歴史、現在の製糸工場のようすなどを紹介しています。

安政6年（1859）の開港以降、昭和のはじめにいたるまで、生糸はわが国の最大の輸出商品でした。富岡製糸場の設立をはじめとして、明治政府は製糸業の発展に力をそそぎました。しかしそのうらで、『女工哀史』や『あゝ野麦峠』にみられるような、製糸工場で働く女性たちの苦労があったことも忘れてはなりません。

羽二重など絹織物の産地として発展してきた福井県の近代の歩みも、絹とともにありました。

昆虫の生命の営みから生み出される絹は、わたしたちの歴史と深いかかわりをもってきたのです。

（田中）

ご連絡ください！

「夢楽洞（万司）」：庶民的な‘絵馬’をさがしています

- □ 「夢楽洞（万司）」の絵馬(馬や物語の絵額)をさがしています。
- □ 江戸期の中ごろから明治期にかけて、庶民にたいへん親しまれた絵馬です。
- □ 福井県の嶺北地方を中心に、あちこちの神社に奉納されているようです。
- □ 博物館では、この絵馬の正確な分布を調べています。どうか、調査にご協力ください。

〈絵の右下に、「万司仙人」・「万仙」・「仙家」などの雅号のある場合があります〉

ふくいミュージアム
No.22
1992．9．30発行

編集発行　福井県立博物館
福井市大宮２丁目19－15
〒910
☎0776－22－4675(代)
印　刷　出口印刷株式会社

福井県